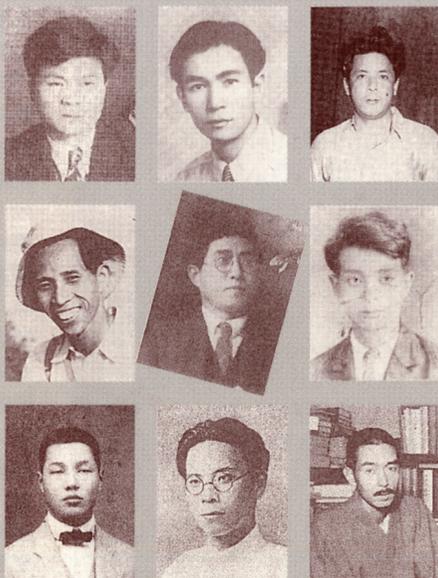


中島利郎編・著

日本統治期台湾文学 小事典



台湾文学研究者待望の事典。

近年の日本統治期台湾文学研究の蓄積と広がりをつまみ、
台湾文学研究を志す人や台湾文学に興味をもつ人の
ための手引書として編纂したものである。

本書は2部構成とし、

第1部は主要な台湾人作家、日本人作家、
文学関連事項等、約300項目を収録。

第2部には「写真で見る日本統治期台湾文学小史」を収録。

台湾文学の歴史を目で見て理解できるように工夫した。

台湾近現代史研究者にとっても必携の事典。

緑蔭書房

刊行にあたって

4、5年前から大学の学部や大学院で台湾文学について講義している。そこでいつも困るのは台湾文学に関する適当な入門書が皆無なことである。台湾では近年、葉石濤『台湾文学入門』や陳万益等編著『台湾文学』等の入門書が出版されて、それを読めばガイドラインや問題点などが分るし、更に進んで葉石濤『台湾文学史綱』を読めば台湾文学の全体像も掴むことができよう。中国語を専攻している学生にはそれらの書を推薦している。しかし、台湾文学を知りたいという人は、中国語を専攻した学生ばかりではなく、日本文学を専攻している学生の中にもおり、日本の植民地における日本語文学について知りたいという要望もある。そこで既存の日本語で書かれた研究書を推薦するが、些か専門的であり、論文などの中に出てくる多くの作家や団体について更に説明を求めにくる。そこで思いついたのが本書の作成である。以前、澤井律之氏と葉石濤『台湾文学史綱』を翻訳出版した。その折りにかなりの量の「訳注」を付けたが、今回はそれを基礎に、過去に緑蔭書房から出版した『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集』『同 台湾人作家作品集』『同 文芸評論集』『日本統治期台湾文学集成』を参考に、『台湾時報』『台湾警察時報』『台法月報』『台湾教育』等の目録を編集した時に知った文芸関係記事及び現在目録を編集中の『台湾日日新報』や『台湾地方行政』の記事も加えて、出来上がったものが本書である。最初は戦後の文学も入れようと考えたが、項目が膨大になり、個人の手には余るし、それにいずれ台湾から十全たる文学事典が出るであろうと考え、今回は「日本統治期台湾文学」に限定して編集した。しかし、いざ項目を作成してみても困ったのは、台湾人作家については既存の資料を使えばよいが、日本人作家については西川満や濱田隼雄等4、5名の人々を除けば、その経歴が殆ど不明なことであった。短歌・俳句・川柳などの伝統文学関係者は最初から項目にはとらないことに決めたが、それでも70名ほどの日本人作家の名があがった。そこで、上記の資料等の中の作家関連記事を丹念に見て、50名前後を項目にとり入れることにした。

以上のように、本書は「事典」としてはまだまだ不備な点が多い。また、作家の履歴等に誤りも多いと思うが、「日本統治期台湾文学」の入門的事項を調べる手引書として、少しでも役に立つことがあればと考え刊行した次第である。

いけだとしお

滞在で29日に離台した。達夫訪台を回顧したものに郭水潭「憶郁達夫訪台」（『台北文物』第3巻第3期）があり、訪台の真意を推測したものに戴国輝「郁達夫訪台の周辺」（1972年5月『中国』第102号）がある。〔6-17・18、7-17〕

池田敏雄（いけだ・としお）

（1916～81）

島根県萩原村生まれ。1924年（大正13年）に渡台し、台北の旭小学校に入学。35年（昭和10年）に台北第一師範学校卒業後、龍山公学校の教員となる。師範時代に短歌を通して西川満を知り、39年に最初の台湾民俗に関する文章「台湾挑灯考」を西川編の『台湾風土記』に発表。以後『文芸台湾』等に寄稿し西川満と親交を持ち、『華麗島民話集』（42年）等を共著で出版する。公学校の教え子黄鳳姿を通して台湾の民俗・風俗の研究に従事、特に「万華」民俗採集に力を注いだ。40年4月には龍山公学校の任期が切れて総督府情報部嘱託となった。また、この年に「南方叢書」の刊行に参画し、「艋舺の籠」を『台湾日日新報』に掲載した。41年5月に『愛書』に黄得時と共編で「台湾に於ける文学書目」を発表、7月には金関丈夫と共に『民俗台湾』を創刊編集し、また黄鷄・牽牛子・月英・李氏杏花等様々な筆名で文章を発表し誌面の経営に尽力した。この頃から西川とは距離を置くようになる。43年には皇民奉公会宣伝部に転属となり機関誌『新建設』の編集に従事し、44年7月には応召した。著作に『台湾の家庭生活』（東都書籍株式会社台北支店、44年8月）がある。夫人は龍山公学校時代の教え子黄鳳姿。戦後は留用されて台

4

【附録2】台湾演劇年表

●明治44年（1911）

★5月4日：日本の新派の祖・川上音二郎（1864～1911）が、台北市の朝日座で「改良劇」を公演し、好評を博したと言われる。音二郎はこの年の11月に亡くなった。

●大正元年（1912）

★元警部補だった莊田という人物と台北の朝日座主人・高松豊治郎等が川上音二郎を真似て台湾語の「改良劇団」を組織し、劇団員を募集したが、集まったのは「流氓」ばかりだったので、「流氓劇」と言われた。川上音二郎の劇団の高野という俳優が演出。全島を巡回公演した後解散。演目は「可憐な壮丁」「洪礼謨（火車棟仔）」「廖添丁」「大男尋父」「巨賊簡大獅」「周成過台湾」「孝子復仇」。解散後、林火炎や陳阿達が「宝来団」を組織し、台南市「南座」で公演したが、資力が不足し解散した。

↑第1部「日本統治期台

↑第1部（附録2）「台湾演劇年表」より

湾編訂
り、島
村哲等
学全集
大系』
平凡社
『台湾
「池田
論」第
敏雄先
は『台
月』が
た。ま
めた『
が緑蔭
石田道
（190
山口県
人。戦
れる。
む台湾
科に学
を創刊
路港湾
（昭和
詩が特
作り始
『文芸
詩作等
少国民
年12月
報部か
吉と龜
イルド
うさん

本事典の構成

- 第1部 日本統治期台湾文学小事典
- 附録1 日本統治期台湾新演劇史
- 附録2 台湾演劇年表

第2部 写真で見る日本統治期台湾文学小史

- 第1章 台湾総督と漢詩人
 - 第2章 台湾新文学の創始
 - 第3章 新旧文学論争と張我軍
 - 第4章 頼和—台湾新文学の父
 - 第5章 台湾新文学の興隆期
 - 第6章 台湾文芸聯盟の成立
 - 第7章 楊達と『台湾新文学』
 - 第8章 日本人作家の台頭
 - 第9章 戦争期の台湾文学
 - 附録 頼和と同時代の作家
- 日本統治期台湾文学国際学術会議

人名・事項名索引

図書館に勤務し、47年4月に島根に帰郷、島根新聞社に勤めた。54年9月には中華の推薦で平凡社に勤め、『中国古典文学』(全33巻、58年)や『中国古典文学』(全60巻、67年)等を企画し、76年に退社を定年退職した。死後、台湾では『風物』第31巻第2期(81年6月)が『池田敏雄先生逝世紀念專輯』、『台湾文学評』第5巻第2期(2005年4月)が「池田敏雄先生逝世廿四周年記念号」を、日本で『台湾近現代史研究』第4号(82年10月)が「池田敏雄氏追悼紀念特集」を出した。2003年2月には、主な著作をまとめた『池田敏雄台湾民俗著作集』(全2巻)が書房から刊行された。[8-5、9-33]

池田敏雄 (いしだ・みちお)

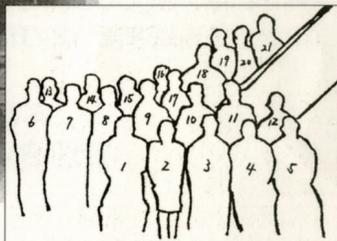
徳山町(現・徳山市)の人。童謡詩人。戦後は「まど・みちお」の筆名で知られる。1919年(大正8年)4月、両親の住居に渡り、台北州立台北工業高校土木科に学ぶ。学生時代には同人誌『あゆみ』を創刊したと言われる。卒業後は総督府道員課、後に台北州土木課に勤務。34年(1919年)、『コドモノクニ』に投稿した詩が採用となり、北原白秋に師事し童謡を始める。台湾時代に『台湾日日新報』、『文芸台湾』や『台湾時報』等に240篇の詩を発表し、また、皇民化への「台湾文化」(『台湾時報』「近感雜記」42号)を主張した。41年には総督府情報課から児童劇の脚本として依頼され「兔耳吉」を執筆している。戦後は『チャップリン』の編集者を勤め、また「ぞくぞく」の詩作で一躍有名となる。理論社

『台湾文学小事典』より

内容見本

→第2部「写真で見る日本統治期台湾文学小史」より

第8章



5 『文芸台湾』に集った作家達(1941年) <故西川満氏からの編者の聞き取りによる>

- 1: 池田敏雄 2: 黒丸郁子 3: 矢野峰人 4: 西川満 5: 今田喜翁 6: 竹内治 7: 周金波
- 8: 高橋比呂美 9: 楊雲萍 10: 長崎浩 11: 黄得時 12: 不明 13: 大賀湘雲 14: 日野原康史
- 15: 川合三良 16: 新田淳 17: 新垣宏一 18: 濱田隼雄 19: 宮田弥太郎 20: 立石鉄巨 21: 万波亜衛

2 『文芸台湾』の作家たち



6 西川満



7 台北第一中学校時代に出した外国文学啓蒙雑誌『文芸桜草』創刊号(1925年1月1日)。西川が出した『桜草』という創作雑誌とは別のもの

中島利郎編・著
日本統治期台湾文学
小事典

- 本事典は「第1部 日本統治期台湾文学小事典」、「第2部 写真で見る日本統治期台湾文学小史」からなる。
- 第1部は、「日本統治期台湾文学」に関する基礎的な文芸事項、約300項目を収録した初心者向けの事典である。
- 俳句・短歌等及び台湾の古典文学（漢詩・漢文）等の伝統文学関係は収録しなかったが、初期の漢詩関係の一部については項目を設けた。
- 収録項目は、「作家」「雑誌」「事項」「作品」である。「作家」で筆名のあるものは一項目に統一し、→でその項目を示した。また、「雑誌」等も文学団体の項目に収録したことがある。「作品」は、基本的に「作家」の中に収め、特別なものに限って項目を立て収録した。
- 本事典は、「新文学」、その中でも「純文学」を原則として項目を立てたが、「大衆文学（通俗文学）」や「新劇（脚本）」、「児童文学」も当然「新文学」構成の重要なジャンルであると考え、若干の作品及び作家については項目を立てた。
- 第2部は、2003年10月に台北の玉山社から『台湾文学百年顕影』として出版したものの中から筆者編著部分並びに天理大学教授下村作次郎氏編著部分を再録したものである。

A5判・上製クロス装・カバー・320頁
定価 9,450円（本体 9,000円） 4-89774-266-8

好評既刊図書

日本統治期台湾文学集成 第一期
全20巻

中島利郎・河原功・下村作次郎監修 未発表作品や新たな研究分野——通俗文学、探偵小説、戯曲・脚本、随筆、詩集等の「日本語作品」を網羅した画期的な文学作品集。なお、第一期の収録作品は単行本28冊、雑誌所収作品総170編。著者は総152名（日本人作家104名、台湾人作家48名）。揃本体189,000円（分売可・編集復刻・四六判）
〈内容〉1 台湾長編小説集一 2 同二 3 同三 4 台湾短編小説集 5 台湾純文学集一 6 同二 7 台湾通俗文学集一 8 同二 9 台湾探偵小説集 10 台湾戯曲・脚本集一 11 同二 12 同三 13 同四 14 同五 15 台湾随筆集一 16 同二 17 同三 18 台湾詩集 19 葉歩月作品集一 20 同二 〈第一期完結〉

緑蔭書房

〒173-0004 東京都板橋区板橋1-13-1 電話 03(3579)5444 振替 00140-8-56567

申 込 書	中島利郎編・著／緑蔭書房刊 日本統治期台湾文学小事典 ISBN4-89774-266-8 定価 9450円（本体 9000円）	<input type="checkbox"/> 部 申し込めます	お申し込み書店名
	お名前		
	ご住所 〒		
	お電話		